

はじめに

パーフェクト リバティー教団(PL)は、人生は芸術であるという理念のもとに、人生の真義は神様から与えられた自分独自の個性を世のため人のために表現すること(自己表現)にあり、人はその自己表現を全うすることによって人生の喜び、幸福感に満ちた生活(芸術生活)を営むことができる、と説いています。

言うまでもなく、自己表現(芸術)は自分自身が行うものです。自分は何もしないのに、他から都合の良いことが起こってきてうまくいくというようなことはないので、もしそのような期待を持つとしたら、それは迷信であると言わざるを得ません。パーフェクト リバティー教団の信仰は、自己表現のための信仰であり、毎日の生活の上に神によりつつ誠を込めて、各人の人間力を無限に発揮させていこうとするものです。

パーフェクト リバティー教団の教義の根幹は『PL処世訓』しよせいくん二十一カ条ですが、『PL信仰生活心得』二十一カ条はその教義の実行の道筋を日常生活に即して示したものです。この心得は、神様(神霊しんれい)を拝みつつ実行すれば、実行しただけ人としての喜びを深めることができます。

本書は、この『PL信仰生活心得』を日常生活の中でより実行しやすいように、簡

条ごとにその意味する内容や実行のポイントなどを、実体験を取り上げつつ分かりやすく解説したものです。あなたの朝から晩までの生活が、PLの教えにかなって自分を祝福し、より一層美しく、心豊かに展開されるとともに、あなたの周辺をはじめ世界が平和であるよう、心から願うものです。

なお、このたび本書を再版するに当たり、かなりの部分を加除・改訂しました。

二〇一四年（平成二十六年）二月

パーフェクト リバティー教団



目次

『PL信仰生活、心得』とは

8

第一条

自分のすること言うことに誠をこめ、心を行き届かして暮らします。

18

第二条

人や物事や天候の不足などを思わず、自分の考えや仕方の足りないところを発見し、何事にも創意工夫の精神を忘れぬようにいたします。

33

第三条

人や物事に感謝の心をもって暮らします。

41

第四条

人のためをはかり、みささげの心を忘れません。

50

第五条

何人にも何事にも腹立てません。

59

第六条

自分の考えにとらわれて強情ばりません。

65

第七条

気ばかり急いだり、心配しすぎたり、物事や自分のことを悲観したりいたしません。

74

第八条

欲な心だしません。

81

第九条

何事にもずるいこととなるような心だしません。

90

第十条

夫婦はしんから仲良くして暮らします。

98

第十一条

子供は神の子と想着て、世のため人のため役立つ人となるように育てます。また子供は親の鏡と悟り、感情の満足に走って情におぼれるような育て方はいたしません。

第十二条

朝は気持ちよく起きます。

第十三条

食べ物の不足思うたり、好ききらい、よりごのみ、食べ過ぎ飲み過ぎ、むらぐいとなることはいたしません。

第十四条

怠け心はだしません。また仕事しながら、不足思うたり人のことを気にかけて不足思うたりいたしません。

第十五条

何事にも度を過ぎさぬようにいたします。

第十六条

自慢の心や偉そうにしたがる心だしません。

第十七条

人の気持ちを悪くするようなこと言いません、いたしません。

第十八条

人を粗末にするような思いたしません。

第十九条

宝生ほうしょうする心を忘れません。

第二十条

感謝新友を授かることに努めます。

第二十一条

神の恵み、おしえおやの恵みを忘れません。

『PL信仰生活心得』
解説

『PL信仰生活心得』とは

道を知らないために

人はだれでも幸福になることを願っていることでしょう。ところが道を知らないために不幸になるような心を、知らず知らずのうちに出して暮らしている人がたくさんいます。例えば、心配事があるから心配する、気をもめることがあるからいらいらしたりせかせかせかしたりする、というのは、PLの教えでは不幸せになる心のうちに入ります。

自分はどうでもそうしなげらばならないと思っっているのに、人がそうしないから腹が立つというのもその一つです。「そんなことではだめだ」といくら言っけて聞かせても、相手がそれを守らないからつ腹が立つ、というのも同じことです。

また、人が話している時、その話の中身をよく考えてみようともせず、心の中でそんなことはないと思っけて否定しているというのも、不幸

せになる心の一つです。そして不幸せになる心が、不幸という形を生み出すのです。

不幸という形は、商売で言えば、損をするとか、繁盛しないとか、お金がもうからないとか、お客が寄りつかないとかというようなことでしょう。体で言えば、病気になるとか、けがをするとかということになります。もちろん、最初からどうにもならない事情が起こったり、大病になったりするものではありません。

初めは、このごろちよつと客足が減ったようだとか、ちよつと肩が凝る、頭が重い、おなかがちくちくする、少しかぜぎみだというようなことから始まるものです。

ですから、初めのうちに不幸せになる心（間違った心）を改めれば、取り返しをつかない、どうにもしようのないような、大変なことにはならないのです。

間違った心とは

心配事があるから心配する、気がもめるからそわそわする、ということとは、一般には当たり前だとか、仕方のないことだと考えられています。

ところが、人間が自分の持つている力を精いっぱい発揮し、思う存分の仕事をしていくためには、心配事があるからといってむやみに心配したり、気がもめるからといって、いたずらにいらついたりしてはならないのです。心配とか急ぎ心とか、強情張る心とかは、持てる力を十分に発揮するのを妨げる間違った心なのです。

間違った心で暮らしていると、事情の上にも体の上にも、いろいろと不幸なことが起こってきます。

〴〵みしらせ〴〵ということ

困ったこと、苦しいことなどを、PLの教えでは、〴〵みしらせ〴〵と言います。

〴〵みしらせ〴〵が現れるのは、腹を立てたり、心配したり、強情張った